2023 年度
情報経営イノベーション専門職大学
入学者選抜試験 一般入試 A 日程

国 語

注 意 事 項

1. 試験時間は 60 分。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。

一

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

人間の活動における「仕事」とは、生産活動のように生きてくうえで生活を成り立たせ、充実させるものである。「遊び」は、仕事のような目的意識に直接結びつけることなく、ただ楽しい時間を過ごすことで、自由であればあるほど楽しい。「学び」は、仕事であれ遊びであれ、それに必要な知識や技術を意識的に、あるいは無意識的に獲得することである。

幼児の段階では、「遊び」と「学び」は区別されることなく行われる。大人の大半の行動様式においても、「仕事」、「遊び」、「学び」を意識的には区別していないだろう。おそらく、仕事と学び、そして遊びが分離するように強く意識しはじめたのは、目的合理性を要求する近代になってからではないかと思われる（『働くことの哲学』ラース・スヴェンセン／小須田健（こすだけん）訳、紀伊国屋書店、二〇一六年、二一～二二ページ参照）。

さて、①労働（labor・労苦）だが、これは強制された仕事である。強制と言ってもさまざまあるが、暴力、脅迫、法律、契約などによる場合が多い。近代社会になって、労働は契約に基づいた金銭など経済的報酬の見返りとして行うものとなり、暴力や脅迫による強制は違法となった。それでも契約の順守には法的な強制が伴うため、何らかの苦痛（labor）がついて回ることになる。

古代ギリシャ人が労働を軽蔑したことは知られているが、それは他人の命令に従って働くからである（前掲書、三二ページ参照）。自主的に働くことは広い意味でレジャー（余暇）に属し、学問や政治活動、あるいは戦争も貴族にとってはそうであった。アリストテレスが言うように、「事業は目的でなく、レジャーのための手段」であった。

従属的に働くのは人間的なものではなく、奴隷のレベルであると考えた。したがって、ここで言うレジャーは、リラックスやレクリエーションとは異なり、幸福や人生の目的を実現するための自由な時間となる。

スコラ哲学は中世のキリスト教神学を構成しているわけだが、ギリシャ哲学を基礎としている。しかし、労働観においては、ギリシャ哲学の考え方を踏襲しないで、労働はキリスト教徒としての「徳」を高めるのに役立つとした。これはヘブライ（古代イスラエル人の文化・思想）の伝統を引き継いだもので、「富む」ということは神に認められた証（あかし）であった。つまり、富むために精進しなければならないということだ。

富むためには、無駄な消費を省き、事業への投資を増やさなければならないし、日々勤勉に働く必要がある。この精神は、「富とは徳にかなった行動の産物」とするプロテスタントに引き継がれて、職業倫理を宗教に基づかせるのではなく、仕事それ自体を宗教にした「天職」という概念に結びつく（前掲書、四四～四五ページ参照）。

一方、カトリックはこれとは違うようである。レジャーを大事にするギリシャ思想の影響が強く、フランスやドイツなどにおいて夏季に長い休暇をとるという習慣は②この伝統に由来しているようだ。

日本人の勤勉さは世界が認めるところであるが、それは何に由来しているのだろうか。イザヤ・ベンダサンというペンネームで知られる評論家の山本七平（一九二一～一九九一）は、「道」の精神にあるとした。「道」は、人間が理想とする人格に至る修行の普遍的な表現である。われわれ日本人は、「剣術」とか「柔術」とは言わず、「剣道」とか「柔道」と言っている。剣術・柔術は人を殺傷し、自らを守る技術であるが、剣道・柔道はそれらの技術を習得するためのプロセスを通して人格の陶冶を目指すものなのだ（『勤勉の哲学―日本人を動かす原理』山本七平、ＰＨＰ研究所、一九七九年参照）。

日本人は、何事においても「道」を求めるのが好きである。日本の野球は単なる「ベースボール」ではなく、「野球道」を目指していると評する人もいる。また、江戸中期の石門心学（注）では「商人道」が説かれている。「商い」は単なる金儲けではなく、人格形成の修業の場であり、「三方よし（自分よし、奉公人よし、周りよし）」といった社会的な貢献が必要であるとしている。

ところで、今述べた[3]「天職」と「商人道」はあくまでも「仕事観」であって、「労働観」ではない。言うまでもなく、一般の労働者にとって現実の職場は「労働の場」であるため、「天職」や「商人道」の対象にはならない。

契約に基づく労働は、雇用主と労働の提供者（労働者、被雇用者）の間において、契約内容が公平であるか、そして交わした契約どおりに履行されるのかが社会的な関心事となる。契約内容での最大の関心事と言えば、労働の対価となる「賃金」である。

賃金がどのように決まり、その水準はどうなっているのかについては、経済学の一分野を構成している。[4]賃金の水準に関しては、どの水準であるべきかということと、現実にどの水準に決まるのかは別の問題である。生産物の価格が労働価値に依存することを主張している労働価値説をめぐる議論の混迷は、この区別がないことに原因がある。しかし、両者は関連しているのだ。

労働者あるいは労働者側は、その水準がどうあるべきかという観点から賃金を雇用主に要求する。一方、雇用主側は、可能なかぎりそれを引き下げようとする。これが理由で、賃金水準は両者の「綱引き」において決まることになる。したがって、賃金の相場は両者の交渉力に依存し、その交渉力には、両者の団結の強さと労働市場の需給関係が影響してくる。

労働者にとっての賃金の最低水準、すなわち「これ以下だと労働の提供を拒否する」というラインは生活の水準に依存している。要するに、これ以下になるとまともな生活ができず、働かないほうがましであるとする水準である。

古典的な表現では、労働力の再生産可能水準（自然賃金率）である。この水準は固定的なものではなく、時代によって、経済の発展段階に応じて変動してきた。福祉国家を標榜する政府は、この水準と順守を法律などによって決めている。

経営者側が支払の拠り所とする賃金基準は、労働の生産性と生産力である。つまり、労働がどの程度生産物に価値を付加し、利潤に貢献する

かである。企業の生産活動と利潤に労働が大きく貢献してくれるなら、それだけ高い賃金を支払ってもよいと経営者側は考えている。

たとえば、プロスポーツ選手の年俸はこの考え方で決められている。人気の高い選手ほど多くの観客を呼び込み、所属球団やクラブの経営に貢献すると判断して高い年俸を払っているわけだ。しかし、年俸にあっただけの貢献をしているかどうかは定かではない。他球団や他クラブの有名選手を獲得する競争で、バブル現象のように、実際の貢献度以上に年俸がつ吊り上がっている場合もある。そして、その分だけ、ほかの選手が貢献度のわりには低い年俸での契約となっているかもしれない。

大量生産方式に見られるように、複雑な工程を単純な工程へと細分し、ルーチン化・マニュアル化すれば、誰がやっても同じ結果が出るようになる。したがって、ルーチン化・マニュアル化された単純な労働は、労働の生産性に関して言えばあまり差が出なくなる。また、肉体的な労働についても、人間の体力には何倍もの差がないので、労働の生産性に差が出るケースは少ない。

一方、知的労働については生産性の個人差が大きくなる。特種な技能や専門的な知識については特別の待遇がなされ、プロフェッショナルな業務やテクノクラート(注)には高い報酬が支払われている。

ＡＩ／ロボット技術の進歩によって、肉体的な労働ばかりでなく知的労働にもそれらが導入されると、肉体労働と知的労働の賃金格差が縮小するだろう。一方、ＡＩ／ロボットの開発や製作、ソフト開発などといった特殊技能と必要とされる知識分野は残るが、それに従事する人数はそれほど多くない。最先端部分に携わる少人数を除き、大部分の労働はマニュアル化されて単純になり、部門間や産業間、それに地域間の賃金格差は縮小される。その結果、生産の成果は資本に多く配分されるようになってしまう。

ところで、ＡＩ／ロボットは電力を使うかもしれないが、労働者のように衣食住にまつわる製品やサービスを消費することはない。もちろん、住居も不要である。このことが、ＡＩ／ロボット時代における最大の経済問題となる。要するに、生産の成果がますます資本に配分されて労働者の取り分が減少すると、消費需要の冷え込みで経済が成り立たなくなるということだ。となると、このジレンマを解決する必要が出てくる。

このジレンマへの楽観的な見方にトリクルダウン理論への期待がある。簡単に言えば、資本所得を得る高所得者層の需要が増えると、それが低所得者の雇用につながるというものである。

少し古い本だが、アメリカの経済学・社会学者ソースティン・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen, 1857～1929）が一八九七年に著した本がある。邦訳書では、『有閑階級の理論』（小原敬士訳、岩波書店、一九六一年）となっている。有閑階級とは、財産をもっているために生産的な労働に従事することなく、閑暇を娯楽や社交などに費やしている階級のことである。

この本で示されているように、高所得者層の需要が洗練された文化を創造し、芸術品や芸能など文化的需要と文化産業の発展に寄与すると期

待しているのがトリクルダウン理論である。[5]それらがＡＩ／ロボットでは生産できない人の手を必要とするモノやサービスへの需要につながれば、先に挙げたジレンマの解消につながるかもしれない。しかし現在、その効果は疑問視されている。

その理由は、以下の三つに要約できる。

❶現在の文化消費を支えているのは中間所得層であり、ＡＩ／ロボットの普及は中間層に打撃を与えることになる。中間所得層が没落すると、有閑階級としての高所得層が生みだした文化的な需要は広がらない。

❷高所得者層の需要はグローバルに広がるので、地域や国内への刺激は部分的になる。

❸ヴェブレンが想定した貴族的な有閑階級とは異なり、現在の高所得者層は産業主義が生みだしたものであるため、産業主義そのものに毒されている。よって、かつての有閑階級が生みだしたような質の高い文化の創造に寄与できるかどうかは大いに疑問である。つまり、高価で贅沢(ぜいたく)かもしれないが、産業主義が生みだす品のない文化の消費者でしかないということだ。

[6]このジレンマの解消には、地域の自立が欠かせない。地産地消の場合、地場で働いている人の待遇がよくならないと地場の需要が増えない。一方、全国展開やグローバルな市場を相手にしている企業などは、地場の経済がどうなろうと関心がないのかもしれない。

彼らは、地域経済が振るわなかったとしても、労働市場が買い手に有利となれば賃金を抑えられるので短期的には問題視することはないだろう。しかし、長期的にはそうならない。地域経済が停滞し、社会インフラが整わないと従業員の定着率が悪くなり、企業の長期的な戦略遂行に影響を与えることになる。一方、地場に足場を置く賢明な企業であれば、この状況を経営戦略に加えるだろう。

（筑後川入道九仙坊『九州独立と日本の創生』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

語注

・石門心学……江戸時代中期に、石田梅岩(ばいがん)が始めた実践哲学。近世町人の日常の生活体験を基礎にして、人間の本性を探究しようとする人生哲学。

・テクノクラート……技術者や科学者出身の、高度の行政・管理能力を有する専門家。技術官僚。

問一　傍線①「労働（labor・労苦）」の説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　人間の生活を成り立たせ充実させる、目的意識をもって行われるもの。
イ　近代社会になって初めて成立し、報酬の見返りとして行われるもの。
ウ　近代では暴力や脅迫による強制は違法とされたが、何らかの苦痛は生じるもの。
エ　近代では自主的に働くものとされ、レジャーのための手段と考えられるもの。

問二　傍線②「この伝統に由来しているようだ」とあるが、「この伝統」とはどのようなものか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　古代ギリシャ人が、他人の命令に従って働く労働を軽蔑していたこと。
イ　古代ギリシャの貴族が、自主的に働くことはレジャーだと考えていたこと。
ウ　ギリシャ哲学を基礎としたスコラ哲学では、労働は徳を積むのに役立つものとしたこと。
エ　ヘブライの伝統を引き継いだプロテスタントが、仕事の上でレジャーの必要性を認めたこと。

問三　傍線③「『天職』と『商人道』はあくまでも『仕事観』であって、『労働観』ではない」のはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　「仕事観」は理想的な働き方を述べていて、実際に働く現場である労働については、全く考慮されていないから。
イ　「仕事観」は「道」のように日本人が共通してもつ観念的なものであって、現実に働く場とは乖離（かいり）しているから。
ウ　「天職」は仕事を宗教化することにより労働者の勤勉さを方向付けたが、日本人は無宗教であり、関係ないから。
エ　「仕事」は生きていくうえで生活を成り立たせ充実させるものであり、契約に基づく労働とは意味合いが違うから。

問四　傍線④「賃金の水準に関しては、どの水準であるべきかということと、現実にどの水準に決まるのかは別の問題である」とはどういうことか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　労働者側が支払ってほしい賃金水準を要求したとしても、経営者側はそれに従う義務はないということ。

イ　労働者側は生活を送るうえで必要な賃金水準を求めるが、経営者側は労働の生産性と生産力によって水準を決めるということ。

ウ　労働者側が求める賃金水準と経営者側が求める賃金水準は違い、その水準は両者の交渉によって決まるということ。

エ　福祉国家は法によって賃金水準を固定化しているが、経営者側は生産性の観点から、労働者によって異なる賃金を支払うということ。

問五　傍線⑤「それらがＡＩ／ロボットでは生産できない人の手を必要とするモノやサービスへの需要につながれば、先に挙げたジレンマの解消につながるかもしれない」とあるが、このように考えた理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　高所得者層がＡＩ／ロボットにはつくれない洗練された文化を創造すると、その素晴らしさから需要が生まれ、低所得者層もモノやサービスに対してお金を使うようになり、経済が活性化するから。

イ　高所得者層がＡＩ／ロボットにはつくれない洗練された文化を創造すると、低所得者層はその文化に基づいたモノやサービスを生産し、それらを高所得者層が消費することにより、低所得者層の所得が増えるから。

ウ　高所得者層がＡＩ／ロボットにはつくれないモノやサービスを欲することは、低所得者層にとって、そうしたモノやサービスを提供するための雇用の機会につながるから。

エ　高所得者層がＡＩ／ロボットにはつくれないモノやサービスを欲することにより、高い賃金が支払われる知的労働が増えることになり、低所得者層全体の所得が増えるから。

問六　傍線⑥「このジレンマの解消には、地域の自立が欠かせない」とあるが、筆者がこのように考えた背景にはどのようなことがあるか。不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　全国規模の企業は、地域以外から利益を上げられるということ。

イ　地域の有閑階級の方が、質の高い文化を創造できるということ。

ウ　全国規模の企業は、地域の労働者の賃金を抑える可能性があるということ。

エ　地域の企業は、従業員の定着率を高めるための経営戦略をとるということ。

二

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

スギ花粉と言えば花粉症の元凶扱いだが、①面白い論文を読んだ。二〇一二年発表の「琵琶湖湖底堆積物に記録された過去一〇〇年間のスギ花粉年間堆積量の変化」だ。執筆は、琵琶湖博物館の林竜馬主任学芸員ほかの方々。

タイトルどおり、琵琶湖の湖底の泥を年代別に分析することで、過去一〇〇年間のスギ花粉の量の推移を調べたものだ。

スギ花粉は、一九〇〇年以降から徐々に増え始め、とくに戦後は激増していた。そして一九九〇年代には一〇〇年前の約一〇倍に達している。これは戦後大規模なスギの植林が行われ、それらの木々が花粉を多く飛散させ始めた年代（樹齢三一年以上）と符合する。やはり現在の花粉症の発症はスギ植林が増えたことと関係が深いことを示している。

ただ、私が「面白い」と感じたのは、そこではない。論文抄録にさりげなく触れられていた「琵琶湖堆積物の花粉分析結果を基にした地史的なスギ花粉年間堆積量との比較」の部分である。それによると「一九八〇年代以降に増加したスギ花粉飛散量と同程度の飛散は、三〇〇〇年～二〇〇〇年前ならびに最終間氷期の後半においても認められた」とある。サラリと書いているが、これは「現代のスギ花粉の飛散量は、縄文時代の飛散量とさほど変わらない」と指摘しているのだ。

縄文時代のスギ花粉量が、花粉症に悩まされている現代とほとんど変わらないということを「抄録」だけで済ませるのはもったいない。ものすごく重要事に思えるのだが。

まず縄文時代に、スギはどれだけ生えていたのか？

日本（とくに近畿圏）の数万年前から数千年前の森林の植生は、広葉樹と針葉樹が混交していたと思われる。そして針葉樹の中ではスギは優勢だったらしい。おそらく当時の天然林に、スギが非常に多かったのだろう。森林自体、平野部を含めて広がっていたので、面積はかなり広かったと想像できる。

もちろんそのスギは天然生であり、人が植えた現代のスギ林とは全然違う。人工的なスギの一斉林（注）ではなく、さまざまな樹齢のスギが、ほかの木々と混交していたはずだ。それなのに現代のスギ林（森林のざっと二割）と同じほどの花粉を飛散させていたとは。

近畿地方では、古墳時代から中世にかけて都が開かれ、寺院や宮殿など巨大な木造建築が多く建てられた。その資材としてヒノキはもちろんスギもどんどん伐られた。そのため天然生のスギやヒノキはほとんど消えてしまった。

巨大建築物の材料を調べた記録によると、最初はヒノキ、次にスギ、そしてケヤキへと移り変わっている。江戸中期になるとそれら天然生の木々が底をつき植林が始まるのだが、そこで選ばれた樹種はまずスギであった。ただ木材不足の時代であり、育てばすぐに伐られる状態だった

ようだ。伐期は二〇～三〇年程度という記録もある。

だから[2]明治時代はスギやヒノキもさほど多くなく、スギ花粉もそんなに飛散していなかったと思われる。それこそが花粉症が目立たなかった理由かもしれない。

ではスギが多く茂り、スギ花粉の飛散が多かった縄文時代を生きた人は、[3]花粉症に悩まされていたのだろうか。

涙目にくしゃみを連発し鼻水を垂らす縄文人を想像するのはそれなりに面白いが、それを証明するのは難しそうだ。そこで縄文人が花粉症になる頻度を考察してみる。

まず縄文人の平均寿命は一五歳に満たなかったと言われている。平均年齢は乳幼児の死亡率に引きずられるが、成人した場合の寿命を考えても、おそらく三〇歳を超えるのは稀（まれ）だったと推定できる。一方で花粉症を発症する年齢は、近年は低年齢化が進んでいるが、一定期間スギ花粉に触れてから発症するケースが多いから、縄文人の場合はその前に亡くなる可能性が高い。

それに体内に寄生虫がいると、花粉症を発症しづらいという説もある。寄生虫に対する防御反応（免疫）は、花粉症が引き起こす過剰免疫と同じものだ。だから免疫細胞が寄生虫に対応していたら花粉への過剰な反応を抑えられる。免疫学からの指摘だが、縄文人の大半は寄生虫を持っていたと思われるから、その説を信じれば花粉症になりにくかったのではないか。

またスギやヒノキの本数が多いとしても、人工林のような一斉林ではないから、周辺には広葉樹をはじめとしてさまざまな木々が生えていたはずだ。だから飛ばした花粉も周辺の広葉樹に遮られる確率も高かったのではないか。琵琶湖の湖底に沈んだ花粉も、実は大気中に漂う時間は短かったのかもしれない。

……などと考えてみると、縄文人はあまりくしゃみをしなかったかもしれない。

では、昔と同程度の花粉飛散量である現代に花粉症に悩む人が増えたのはなぜか。単に森林側の問題だけではなく、寿命が延び、花粉に過敏に反応するように人間の身体や住まい環境を大きく変えてしまった社会にも原因があるのではないか。

ちなみに花粉症とは人間だけのものと思われがちだが、動物も花粉症になることが確認されている。とくに注目されたのは、ニホンザルだ。

最初に発見されたのは、一九八六年の広島県廿日市（はつかいち）市の宮島（みやじま）である。日本モンキーセンター宮島研究所（現在は廃止）で花粉症の飼育員が、同じように鼻水を垂らして涙目になっているサルを発見したのだ。そこで研究が始まって、実際にサルの血液からスギ花粉の抗体が見つかり、花粉症の罹患（りかん）認定がされるようになった。その後、淡路島（あわじしま）などのニホンザルも花粉症の個体がいることが確実になった。

さらにその後、イヌやネコでも花粉症になることが確認された。症状はサル以上にわかりにくいが、基本的な症状は人間と一緒で、鼻水やくしゃみ、目のかゆみなど。ひどくなると四肢の先端や下腹部、目の周り、耳などの皮膚にも炎症が起きるらしい。人やサルのようにかゆいとこ

ろも自分でかきにくいだけに、辛(つら)いだろう。

サルにイヌ、ネコにとどまらず、おそらくほかの哺乳類にも花粉症はあるのだろう。人間だけが苦しんでいるわけではない。

花粉は自然物だ。それに生き物が苦しめられるのはおかしい、自然界を歪(ゆが)ませた現代社会が生み出した病ではないのか……と思いたくなる気持ちもわかるが、それほど単純な関係ではなさそうだ。むしろ縄文人も苦しんだ、サルもイヌもネコも苦しんでいると思えば、多少は気が楽になる……かどうかはわからない。

④花粉症を憎んでいる人が、よく口にする意見がある。

「スギばかりを政策的に大量に植えたのも問題だが、その後林業が衰退して手入れが十分されずに、スギは花粉をたくさん飛散させるようになった。これは政府の失政である」といった内容だ。とにかく政府が悪いから自分は花粉症で苦しんでいるのだ、政府よ、なんとかしろ、と言いたいのだろう。

たしかに戦中の乱伐がたたって一九四〇年代、五〇年代は日本の山ははげ山が多かった。そこで戦後の政府は、大造林を推進する。当時の木材価格は高かったので、スギなら植えて四〇年もすれば高く売れることを計算して、人々もこぞって植えたのである。ところが、その後木材価格は低迷し、伐って出しても経費を賄えないほどの価格でしか売れなくなった。そのため放置する林家(注)も増えて、荒れたスギ林も増えた。

スギは植林時に密に植える（現在は多くが一ヘクタールに三〇〇〇本の苗を植える。ざっと二メートル弱の間隔）ため、そのまま放置すると密生状態になって木々が衰弱する。だから適時、間伐を行う必要があるのだが、それを怠っている山が少なくない。

ここまではよい。事実だ。だがこのあとに「手入れされない木は花粉を多く出す」という理論がくっついている。それは言い換えると「枯れかけた木は、死ぬ前に子孫をつくろうと花を咲かせて花粉をたくさん出して飛散させる」という理屈になる。

そこで間伐を施せば、スギが元気に育つようになって花粉も減るという論法だ。枝打ちも花粉をつける枝を減らすだけでなく、木々の間隔を空けることを狙っている。しかし、それは本当なのか。

よく考えてほしい。「枯れる前に子孫を残そうとする」とか、スギの本数や枝を減らしたら花粉の飛散する量が減るという発想は正しいのか？なんとなく納得してしまいがちだが、それを示す実験データはあるのか。あまり科学的とは言えない。

昔から「生物は死ぬ前に次世代の子孫を残そうとする本能がある」という言い方をされてきた。「死して、子孫を残す」というのは格言的でもある。たしかに次世代をつくらねば種として終わってしまうのだから、それ自体は本能と言ってもよいが、死ぬほど衰退している時にあえて繁殖をするかどうかは怪しい。

たとえばゴキブリは死ぬ前に産卵すると言われることがある。殺虫剤をかけると卵を撒(ま)き散らすというのだ。しかし、それは卵ではなく卵(らん)鞘(しょう)という、卵がたくさん入った塊のようなものだ。もともとメスは交尾して受精卵をつくると、それを卵鞘に入れてしばらく体につけて運ぶ。その時に殺される、あるいは死ぬような危険を感じると卵鞘を切り離すのだ。何も、死ぬと決まってから卵を産むのではない。

またネズミなども同じような見方をされることがあるが、そもそもネズミのような動物は寿命が一、二年しかない。オス・メスが出会って交尾、そして出産したら、非常にエネルギーを使う。出産後、そのまま死ぬこともある。これを人間が後付けで「死ぬ前に交尾をした」「出産した」と見てしまうのではなかろうか。

植物も同じだ。「トマトはミツバチが葉にダメージを与えると開花を促す」現象があるという。ストレスが性成熟を早めるらしい。病害や虫害、あるいは、栄養・水分条件に異常が生じて生存に危機を覚えるほどのストレスが続くと花芽(かが)ができることがある。つまり繁殖のスイッチが入るのだ。本来なら四季の移り変わりによる気温の低下や長雨などの刺激がスイッチになるところ、異常なストレスが誤った信号となって花芽形成を始めるのだと考えられている。

枯れるほどの外的ストレスによって花を多く咲かせ、種子をたくさんつくる（その後死ぬ確率が高い）のだから、これを「枯れる前に子孫を残そうとした」と言えなくもないが、⑤ちょっと感傷的な人間側の勝手な解釈だろう。因果関係が逆転しているのではないか。

むしろ植物が衰弱すれば、雄花は減り花粉生産量も減少すると考えるべきではないか。花粉と胚珠(はいしゅ)、あるいは卵子と精子をつくるのは植物にとって非常に大きなエネルギーを消費する活動である。それを受粉（あるいは受精）させる活動もエネルギーを浪費する。栄養の多くをそちらに回せば、本体は余計に弱る。それは動物も同じはず。

それよりも繁殖活動をしばらく休止させて、自らが生き残る戦略を取った方がよい。とくに樹木は寿命が長いから、仮に密生して光が当たらず生育も悪い状況に留め置かれたとしても、じっと耐えていれば数十年後に隣接する木々が枯れて、いきなり光が当たるようになるかもしれない。その時に、一気に梢(こずえ)を高く伸ばせば、周りを睥睨(へいげい)する巨木に生長できる。若い頃にあまり生長できなかったら、年輪も密になる。それは幹が硬くて折れにくいことを意味するから、その後の生存に有利に働く。

実際にそうした生存戦略を取る植物は少なくない。稚樹の頃は耐陰性が強く生長は遅いが、明るくなると陽樹として日光を浴びて大きく生長するのである。たとえばヒバ（アスナロ）などは、耐陰性が非常に強い植物で、何年も日陰でゆっくり育つが、いざ明るくなると高木に生長する。

果たしてスギにそんな性質があるのか。衰弱した個体と健康な個体の生産する花粉量の違いについての論文は見たことないが、可能性としては考えられる。

そこで気づいた。現在の人工林の多くが手入れ不足（間伐遅れ）で健康ではないとしたら、むしろ花粉の生成量は減っているはずだ。つまり花粉飛散量は、木の本数のわりには少ないのではないか。なにしろスギは、日本の森林の約二割を占める面積に生えているのだ。ヒノキも加えれば三割を超す。それらが元気に育っている場合を想定すると、推定できる花粉飛散量は、現在よりもずっと多くてもおかしくない。つまり春先には、現在の数倍の花粉が舞っている状態も想像できるのではないか。

現在の間伐不足が、花粉の飛散量を今ぐらいに抑えているとしたらどうだろう。手入れ不足の現在の林業事情に感謝しなくてはなるまい。そこに補助金を注ぎ込んで、間伐や枝打ちをせっせとすれば、スギもヒノキも元気になって、雄花がたくさん育ち、花粉の飛散量は増加していく……それでもいい？

（田中淳夫『虚構の森』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

語注

・一斉林……樹種，樹齢がそろった林

・林家……林業を営む世帯。

問一　傍線①「面白い論文を読んだ」とあるが、どのような点が面白いのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　過去一〇〇年間のスギ花粉量がわかり、特に戦後は激増している点。

イ　戦後の大規模なスギの植林と比例するように、花粉が増えている点。

ウ　現代のスギ花粉の飛散量と同程度の飛散量が、縄文時代にも認められる点。

エ　縄文時代の天然杉は、現代の植林された杉と同じくらい生えていた点。

問二　傍線②「明治時代はスギやヒノキもさほど多くなく、スギ花粉もそんなに飛散していなかったと思われる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　木造の寺院や宮殿などが全国各地で建てられたために、生えていたスギがほとんど伐られたから。

イ　スギの天然林がほぼなくなり、植林されたスギも、木材にするためすぐに伐られたから。

ウ　明治時代に花粉症で悩んでいた人は、現代と比べて大幅に少ないと考えられるから。

エ　明治時代に植えられたスギは無花粉であったため、花粉が飛散していなかったから。

問三　傍線③「花粉症に悩まされていたのだろうか」とあるが、縄文人が花粉症に悩まされていなかったと考えられる理由として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　縄文人の多くは一五歳で亡くなるので、花粉症を発症しないと考えられるから。

イ　体内にいる寄生虫に対する防御反応によって、花粉への過剰な反応が抑えられたから。

ウ　スギ以外にもさまざまな木々が生えていたため、飛散した花粉が遮られた可能性があるから。

エ　花粉の量は現代と同程度だったが、人間の身体や環境が、花粉に過敏に反応するようなものではなかったから。

問四　傍線④「花粉症を憎んでいる人が、よく口にする意見がある」とあるが、筆者はこの意見についてどのように考えているか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　戦後、木材価格が低迷することが予想できたにもかかわらず、スギの植林を進めたことは問題である。

イ　手間のかかる林業より楽に稼げる職業に転職し、スギ林を放置する林家が増えたのは仕方がない。

ウ　確かに、政府はスギを大量に植え、手入れも十分されていないので、政府の失策であることは疑いようがない。

エ　間伐の不足がスギ花粉の飛散量を抑えていると考えられるため、意見は論理的とはいえない。

問五　傍線⑤「ちょっと感傷的な人間側の勝手な解釈だろう」とあるが、それはどのような解釈か。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　心を動かされて、論理よりも感情に従った解釈。

イ　理想的に物事をとらえ、つじつまを合わせた解釈。

ウ　過度に悲しんで心を痛めたため、現実が見えなくなった解釈。

エ　感動的なストーリーをつくり、悦に入るための解釈。

問六　この文章を読んだ生徒どうしで話し合っている。文章の理解に誤りがあるものを選び、記号で示せ。

ア　生徒A：私は花粉症に毎年苦しんでいるから、できれば間伐しないでほしいけど、森が不健康かもしれないというのは問題よね。

イ　生徒B：うーん。健康な木からは明らかに花粉が増えるから、現在の花粉症の広まりを考えると、間伐はしないほうがいいかな。

ウ　生徒C：だけど、スギ林は日本の森林の二割になるから、地球温暖化を考えると、手入れはしていったほうがいいと思うな。

エ　生徒D：私も、花粉量は増えるかもしれないけれど、間伐や枝打ちで森を健康にするほうが、地球の今後を考えると必要なことだと思うな。

三

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

おしゃれなカフェでふたりの女性が話しています。友だちどうしでしょうか。

「わたし、このまま結婚しないでいようと思うんだ」
「ふ〜ん、どうして」
「なんだか結婚って息苦しいし、このまま一人のほうがラクだなって……」
「そっか〜、ま、人それぞれだもんねぇ」

次に、とある大学の授業を覗(のぞ)いてみましょう。どうやら討論形式の授業をしているようです。

「今日のテーマは『私たちはオンラインの環境を制限した方がよいのか』です。グループに分かれて、一〇分くらい議論してください」
教員の掛け声とともに、学生が気だるそうに移動する。
「オンラインの制限だってよ。どうする？」
「どうしよっか」
「強制とか制限っていうより、人それぞれでよくね？」
「そうだよなぁ……」

皆さんも誰かと話しているときに、つい「人それぞれ」と言ってしまうことはありませんか。ここにあげたような会話は、こんにち、いたるところで見られます。この章では、あるていど顔を見知った関係のなかで展開される「人それぞれ」のコミュニケーションに注目していきます。

「一人」になれる条件が整い、人びとの選択や決定が尊重されるようになった社会では、さまざまな物事を「やらない」で済ませられるようになります。ある行為を「やらねばならない」と迫る社会の規範は緩くなり、何かを「やる」「やらない」の判断は、個々人にゆだねられます。

この傾向は人間関係にも当てはまります。私たちが生きる時代は、閉鎖的な集団に同化・埋没することで生活が維持されてきたムラ社会の時

代と違います。生活の維持は、身近な人間関係のなかにではなく、お金を使って得られる商品やサービスと、行政の社会保障にゆだねられるようになったのです。

このような社会では、誰かと「付き合わなければならない」と強制される機会が、徐々に減っていきます。会社やクラスの懇親会への参加はもはや強制される時代ではありません。地域の自治会への加入も任意性が強くなりました。趣味のサークルを続けるか続けないかは、まさに「人それぞれ」でしょう。

誰と付き合うか、あるいは、付き合わないかは、個々人の判断にゆだねられています。俗っぽく言えば、私たちは、（嫌な）人と無理に付き合わなくてもよい気楽さを手に入れたのです。

今や、人と人を結びつける材料を、生活維持の必要性に見出(いだ)すことは難しくなりました。[1]人と人を結びつける接着剤は、着実に弱くなっているのです。

では、このような社会で、つながりを維持するにはどうすればよいのでしょうか。生活維持の必要性という、人と人を強固に結びつけてきた接着剤は弱まっています。そうであるならば、私たちは、目の前の関係をつなぎ止める接着剤を新たに用意しなければなりません。そこで私たちは、弱まってきた関係をつなぎ止める新たな補強剤として、つながりに大量の「感情」を注ぎ込むようになりました。

このような傾向は、メディアからも読み取ることができます。日本映画界の巨匠、小津安二郎(おづやすじろう)監督の作品に、[2]『長屋紳士録』という短い映画があります。この映画は、終戦から二年後の一九四七年に公開されました。当時は、東京下町を舞台にした人情劇と評価されています。簡単にあらすじを紹介しましょう。

おもな登場人物は、長屋の住人と少年です。物語は、長屋に住む女性のところに、実の親とはぐれてしまった子どもが届けられるところから始まります。そのさい、長屋のその他の住人とひと悶着(もんちゃく)あるのですが、結局、女性が少年の面倒を見ることになります。

最初は子どもの世話を嫌がっていた女性も、だんだんと情が移り、子どもをかわいらしく思ってきます。しかし、その矢先に、子どもを探していた実の親が登場し、女性と子どもの間に別れが訪れます。子どもが去った後、女性はあらためて親子のつながりのよさに気づく、というのが大まかなあらすじです。

長屋の住人は、鍵もかけず、お互いの家にしょっちゅう行き来をし、何かにつけ雑談をします。親子のつながりや、長屋の住人どうしの密接な交流。こういった言葉からは、「昔ながらの温かなつながり」を想像することができます。

しかし、今の人びとが見ると、この映画に対してかなりの違和感を抱くでしょう。その理由は、登場する人びとの感情的な交流の少なさにあ

ります。

人情劇であるこの映画のなかで、スキンシップと言いうる場面は、少年が女性の肩をたたくシーン以外、いっさいありません。感情的な交流の少なさは、実の親と子どもの再会のシーンに集約されます。

物語のクライマックスである親子の再会、および、少年と女性との別れは、現在の感覚からすると、さぞ感動的に演出されるのではないかと思います。しかし、『長屋紳士録』において、そのような表現はまったくありません。

再会を果たした親子は、互いに駆け寄ることも、抱き合うこともありません。それどころか親は、近寄る子どもを手で押しのけ、女性にお詫(わ)びと御礼(おれい)の挨拶をすることを優先させます。つまり、儀礼を優先しているわけです。

子どもと女性の別れのシーンでも、涙や抱擁はいっさい見られません。少年が「③オバチャンサヨナラ」とぶっきらぼうに述べ、別れのシーンは終わります。ここから、「人情劇」と言われた映画でさえも、感情表現は非常に乏しいことがわかります。

この映画を見た学生は、「昔のつながりは濃密だけど感情や気遣いが薄く、今のつながりは希薄だけど、感情や気遣いが濃い」と述べていました。この言葉は、④感情に満たされた今の人間関係をよく表しています。

しかし、感情に補強されたつながりは、それほど強いものにはなりません。私たちは、相手とのつながりを「よい」と思えば関係を継続させるし、「悪い」と思えば関係から退くこともできます。この特性のおかげで、私たちは、無理して人と付き合わなくてもよい気楽さを手にしました。理不尽な要求や差別的な待遇から逃れやすくなったのです。しかし、人と無理に付き合わなくてもよい気楽さは、つながりから切り離される不安も連れてきてしまいました。

お互いに「よい」と思うことで続いていくつながりは、どちらか、または、両方が「悪い」と思えば解消されるリスクがあります。放っておいても行き来がある長屋の住人とは違うのです。このような状況で関係を継続させるには、お互いに「よい」状況を更新してゆかねばなりません。つまり、つながりのなかに「よい」感情を注ぎ続けねばならないのです。

この特性は、その人にとって大事なつながりであればあるほど強く発揮されます。私たちは、大事なつながりほど「手放したくない」と考えます。しかし、あるつながりを手放さないためには、相手の感情を「よい」ままで維持しなければなりません。大事な相手とつながり続けるためには、関係からマイナスの要素を徹底して排除する必要があるのです。

とはいえ、個々人の心理に規定される「よい」状況は、社会に共有される規範ほどには安定していません。社会のルールはなかなか変わりませんが、個人の感情は日によって変わることもあります。何かの拍子に、ふと、「悪い」に転じてしまうこともあるのです。つまり、人と無理

に付き合わなくても良いつながりは、ふとしたことで解消されてしまう不安定なつながりとも言えるのです。

かといって、目の前のつながりを安定させる最適解は、そう簡単に見つかりません。人の心を覗くことはできませんから。

コミュニケーションの指南書が書店に並び、「コミュカ」や「コミュ障」といった俗語が流布する現状は、コミュニケーションにまつわる人びとの不安を物語っています。私たちは、人間関係を円滑に進めてゆく行動様式がはっきり見えないまま、相手の心理に配慮しつつ、コミュニケーションを行う⑤厄介な状況にさらされているのです。

⑥この厄介な状況に対処するにあたって重宝されてきたのが、「人それぞれ」を前提としたコミュニケーションです。私たちは、たとえ相手の見解が、自身の見解と異なっていたとしても、「人それぞれ」と解釈することで、対立を回避することができます。あるいは、相手の行動が自身にとって理解できないものであっても、「人それぞれ」とすることで、問題化することを避けられます。

たとえば、この章の冒頭にあげたやりとりを振り返ってみましょう。ここで、「一人のほうがラク」と語る友人に対して、「一人でいるなんて寂しくない⁉　結婚した方がいいよ」と答えるのは、あまり望ましくありません。というのも、結婚を勧める言葉は、「一人でいる」という友人の決断を損なう可能性があるからです。友人の決断を損なう行為は、相手の意思の尊重という意味ではあまり望ましくありません。かといって、慰めるのも、友人を下に見ているように思われる可能性があります。こうしたときに、「人それぞれ」と無難に収めておけば、とりあえず波風は立ちません。

ふたつ目の例は、率直に考えを述べる難しさを表しています。個の尊重を前提とした「人それぞれの社会」では、相手を否定しないことに加え、自らの考えを押しつけないことも求められます。それぞれの意思を尊重する社会では、意見を押しつけず、それぞれの考え方を緩やかに認めることが肝要なのです。

このような環境では、たとえ、自身はオンラインを制限した方がよいと思っていたとしても、それを表明すると、考えの押しつけになってしまいます。「人それぞれ」のコミュニケーションは、このようなときにも重宝されます。というのも、「人それぞれ」という言葉を使っておけば、自らの立ち位置を守りつつ、相手の意思を尊重することも可能だからです。

不安定なつながりのなかを生きる私たちは、「人それぞれ」という言葉を使って、お互いの意見のぶつかり合いを避けています。このようななかで率直に意見を交わし、議論を深めるのは、そう簡単ではありません。

（石田光規『「人それぞれ」がさみしい』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

問一　傍線①「人と人を結びつける接着剤は、着実に弱くなっているのです」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　懇親会や自治会など、かつては義務だったものが全て、任意の加入になったから。
イ　現代の日本は、嫌な人と無理矢理付き合ってはいけない、気楽な社会になったから。
ウ　「人それぞれ」が口癖になってしまい、他人に注意を払わなくなってしまったから。
エ　身近な人間関係のなかにあった生活の維持は、サービスや社会保障が担うようになったから。

問二　傍線②「『長屋紳士録』という短い映画があります」とあるが、この映画から筆者は何を読み取ったのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　昔ながらの温かなつながりは見せかけのもので、昔の人は感情的な交流もスキンシップもほとんどしていなかったということ。
イ　子を捨てるような、血のつながっている親子関係より、貧しい長屋で育まれた、かりそめの親子関係の方が大事だということ。
ウ　昔の日本人は感情を態度で表すことが苦手で、心を動かすような場面であっても儀礼的な行動の方を重んじていたということ。
エ　昔は人びとのつながりがあったため感情表現の必要性が少ないが、今はつながりが薄いため感情的な交流を大事にしているということ。

問三　傍線③「オバチャンサヨナラ」と、カタカナで表記した意図は何か。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　漢字やひらがなを扱える年齢ではないことを示すため。
イ　親に手で押しのけられた少年の、怒りが収まらないことを表すため。
ウ　感情をあまり入れない、そっけない台詞（せりふ）だと伝えるため。
エ　別れのシーンで終わる、映画の唐突さを表現するため。

問四　傍線④「感情に満たされた今の人間関係」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　お互いの選択や決定を尊重することができる、安心感に満ちた人間関係。
イ　弱まったつながりを大量の感情によって補強した人間関係。
ウ　気楽さと不安に満たされた、いつ破綻するかわからない人間関係。
エ　「よい」感情を満たすことによって存続する、安定した人間関係。

問五　傍線⑤「厄介な状況」とはどのような状況か。その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　無理して付き合わなくてもよい気楽さを手に入れたが、つながりを継続するためには相手の感情を「よい」ままで維持する必要があり、しかし、相手が何を「よい」とするかという明確な規範がない状況。

イ　感情によって補強されたつながりはあまり強くなく、そのため、頻繁に交流することで相手の感情を「よい」ままにするべきであるが、どのタイミングで行き来すればいいかは個々人によって違うという状況。

ウ　気楽な関係をつくることのできる時代だが、同時につながりから切り離される不安もあり、つながりを維持するために相手の感情を「よい」ままにしようと、お互いに共有できる規範をつくる努力が必要な状況。

エ　人と無理に付き合わなくてもよいつながりであるため、いつでも解消されてしまう不安定さも持ち合わせており、自分が仲のいい友人から捨てられないために、指南書を読まざるを得ない状況。

問六　傍線⑥「この厄介な状況に対処するにあたって重宝されてきたのが、『人それぞれ』を前提としたコミュニケーション」とあるが、なぜ「人それぞれ」は重宝されるのか。不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　自分と異なる意見でも、「人それぞれ」と解釈することによって、対立を回避できるから。

イ　相手の行動が理解できなくても、「人それぞれ」と思えば、問題視せずに済むから。

ウ　相手の考えを否定せず、同時に、自分の意見を表明することができるから。

エ　自らの立ち位置を守りつつ、相手の意思を尊重することが可能になるから。